ゴッホ

JJ1SXA　池

2月8日の競売の2日前までは、作者不詳で、1万～2万円の落札価格が予想されていた絵が、6600万円で落札されました。

ゴッホの油彩画「農婦」のことです。

この作品が、ゴッホの物で無かったら二束三文で、ゴッホという鑑定がついたら6600万円というのは驚きです。

絵の持ち主であった洋画家・中川一政さんは、無味・平坦に見える中の非凡さを見抜いていたのだろうと、2月 11 日付けの朝日新聞の天声人語で、芭蕉の句を例に挙げて書かかれていました。

私は、絵には、とんと興味が無いのですが、というより全くもって芸術的センスに欠け、絵のみならず、音楽その他全般、芸術的なものの理解ができません。

だからこそでしょうか、芸術家ばかりでなく、そういう芸術的なセンスの持ち主には、畏敬の念を禁じ得ません。

一寸、ゴッホの事を調べたら、

・・・ゴッホの作品は生前認められず、ただ一人ゴッホの理解者である弟テオの仕送りによって生計が立てられていたそうで、伝道師として赴いたベルギーで、貧しい人達への施しが『常軌に逸する』と判断され、伝道師の資格を得る事ができなかったゴッホは、好きな絵を描いていこうと決心。

神経が細やかで感受性豊かなゴッホは度々神経を病み、静養に訪れたオーヴェルで多くの名画を描きながらも認められず、人生の夢に破れ 37 歳でピストル自殺をする・・・・

・・・何枚もの「向日葵」は、共同生活のためにやってくるゴーギャンを迎えるため、真冬のアルルの「黄色い家」の中で描かれたという。

ほとばしる情熱と期待は、明るい太陽の色の黄色として踊るようにキャンバスに塗りこめられている。・・・と書かれていました。

素晴らしい絵は、例え絵に関する知識がなくても見る者の魂を容赦なく掻き乱し、何かを求め続ける芸術家の情熱は、伝達方法が異なってもほとばしり出て精彩を放つものだそうです。

こうやって書かれていると、何と無くわかるのですが、自分の感覚でそれがわからないのが悔しく、こんな私を産み、育てた両親を恨みたい心境です。

と言っても、今更恨んでも仕方が無い事なので諦める事にして、まあ、凡人は凡人らしく生きることにしましょう。

第 55 号(平成 15 年 3 月発行)掲載